

最優秀賞

## 三人目のおじいちゃん

京都市立御所南小学校 1年 小泉 遼輔

「おはよう。きいつけていきや。」

ぼくには、三人目のおじいちゃんがいる。きんじよにすんでいてぼくらのとうこうをまい朝みまもつてくれている。おじいちゃんはまがり角で手おし車にこしかけて、さんぽをしている人やごみしゅうしゅう車の人に声をかけている。ぼくたちにも声をかけてくれた。

これがぼくとおじいちゃんとの出あいだった。さいしよは「おはよう」と声をかけてくれてもはずかしくて小さな声しか出なかった。

でも、まい朝声をかけてくれてだんだんあうのが楽しみになってきた。ある日、ぼくは、おじいちゃんの名前を知りたくなってお母さんと家で自分の名前をなのつてからきくれんしゅうをして、ゆうきをだしておじいちゃんに名前をきいた。おじいちゃん、えがおでおしえてくれた。でもしばらくして出あわなくなった日がなん日かつづいた。ぼくは何かあったのかと思つてしんぱいして、手がみをかいて、家のポストに入れた。

何日かたつてへんじが来た。手がみをあけると、おばあちゃんが病気でしばらくおじいちゃんがさんぽに行けなくなつたよとかいてあつた。まい朝おじいちゃんがみちで手をふつてまっ

ててくれるのがあたり前だと思つていたけれど、あえなくなるのと、あいたいが大きくなっていった。ぼくはさみしかつた。冬に会つたときにぎつてくれたあつたかい手を思ひだした。春になつてぼくは一年生になつた。おじいちゃんのえがおをときどき思ひだしながら学校にかよつてすこしずつ学校になれてきた。新しい友だちもたくさんできた。こんどまたあえたら、「おばあちゃん元気になつた？」ときいてみたい。「ぼくは、とびばこ八だんとべるようになったよ。」と、つたえたいな。

(審査評) 毎朝の登校時、いつもと同じ場所、笑顔で挨拶をしてくれるおじいちゃん。特別な繋がりがあるわけではないけれど、五才の少年にはその交流が一日の始まりとなり、忘れられない関係となっている。初めは名前を聞くことにも精一杯の勇気を振り絞つた日から、当たり前の日常となつたある日、いつもの場所におじいちゃんがない。とても心配になり、お母さんと相談をし、手紙を書いてみようという遼輔君の優しさがとても印象的。始まりは挨拶だけの関係が、心の距離を縮めるつながりにまで発展したことが、作中一文一文に詰め込まれ読んでいて心温まるストーリーでした。

柿本遼平